

《ロンドンからのたより(両親宛)》 ·1972b
～オペア(aupair)見聞録:その2～



1972年8月29日

お父さま&お母さまへ

とうとうホストファミリーを変わりました。まるっきり‘籠から逃れた小鳥’のようにもう楽しくって笑って生活しています。ついこの前までの J. 家での暮らしが嘘のようです。今でもまだちょっと身心共に幾らか緊張が抜けないぐらいなのです。何しろ、いつもいつも何々しなきゃ怒られるって思いが強迫的に頭から抜けない日々でしたから。ほんと自分の横着できない律儀な性格が恨めしいわけ。もはや今ここではそんなこと全然無いのです。今振り返ってみても2ヵ月半ほどの J. 家での生活はスツチャカメツチャカ狂想曲と云うか、実にひどかったんだなあって、よく耐えたものだと思っても呆れる思いです。此の度引越しの手伝いをしてくれたオペア仲間のクミコさんがくまるでたった今、英国に着いたみたいじゃない?! >って私に共感して慰めてくれたのですが。その通りなのです。何もかも忘れて、今から出発するつもりです。時間とエネルギーを無駄にしたんじゃないのかってちょっと憤りすら覚えたけど、もう過去を今更云々することもありません。これからの未来と現在に賭けてみようと思ってます。

つい先日のたよりでお伝えしましたが、ここしばらくあちこち病院や学校を覗いてみて廻ったのです。けれども、結局はまだまだいかなる意味でも報酬を得るだけの専門的スキルを提供しうるには今の自分では時期尚早だということに認めざるを得ないのです。語学力の面からして自分が専門性を発揮するにはまだまだ未熟なのです。またいかなる職場であれ、此の国の

人たちと対等もしくはそれ以上により指導的な地位を保つといった場合にはやはりまずは言葉の問題をクリアしなければなりません。つまりは此の国では私はまだまだ‘半人前’なのだと言うべく観念したわけ。そして英語力をもっと身に付けることが何よりも先決なのだと思います。もはやうろうろ脇見せずに、取り敢えず語学研修というスタートラインに立ち還ったことになります。

J.さんのお宅ではまったく勉強の時間がままたまらない程に日々いろいろな雑務に追われ、かつ夫人とレベッカの気紛れに煩わされることが多々ありましたから、絶対に私はお気楽でハッピーというのではなかったのです。オペアと云っても単にイギリス滞在一年だけの語学留学とも違うのですし、やはり専門家としての未来を此の地でどう開拓してゆけばいいのかという不安に常に苛まされているため、どうしても唯々ホストファミリーと和気藹々に暮らしていればいいといった悠長さが自分には欠けていたことがあちらにもお気の毒ではあったかも知れない。しかし私の事情は AWL のマッチングの際に、先方に予め伝えられてあったわけですから。それに確かに小児科医である Dr.J. がいずれ私をいろんな人に会わせてくださり、就職の手助けをしてくれるかも知れないけど、彼の縁故でインド・パキスタン系の移民難民の人々と交わり、その係累に取り込まれるのじゃないかと思うとあまり気乗りがしません。人種的な偏見のように聞こえるけど、やっぱり一緒に暮らしてみても解るのよ。難しいってことが…。それは云うに云われぬ難しさであり、生粋のイタリア人の Mrs.J. 夫人は実に恰好のいい例なのです。文化的摩擦ゆえのストレスというか…。そこそ夫は知識階層だとしても、彼女はやはり Dr.J. のインド・パキスタン系の親族やら友人やらに溶け込めずに苛立ってるのを薄々感じるわけなの。

ともかく現在私自身がハッピーじゃないのは宜しくないと、あれこれ思案の挙句ついに変わろうと決心して、土曜日に或るエージェンシー(オペアの斡旋所)へ朝行って紹介してもらい、晩には決まったのです。そして土曜・日曜と掛けて家中を、それに裏庭をも綺麗に掃除して、月曜日の朝には J.家を出ました。後は留守居役のマーガレットとアイリンに頼んだのです。なにもかもほんとに気持ちがあすきりました。

新しいホストファミリーは、Mr.&Mrs.F.さんと云います。まともな英国人(白人)のご夫婦で、成人している娘さんと息子さんが一人ずつおられ、それぞれが結婚して別居しています。だけど、同居している家族というのも変だけど、犬が5匹もいるの！その犬がちっこくて(小型犬)、ほんとに嘔き出したくなるような滑稽な犬で、日本では見掛けたこともないヘアレス・ドッグ(無毛!)なの。愛嬌があって人なつっこい。そんなのが5匹も部屋中をうじゃうじゃとろつき回っているもんだから、そりゃあもう全然退屈しません。子育ても済ませて、あとは二人でリラックスして暮らしてゆきましょうよといった感じの年輩のご夫婦で、私のことも自由放任というか、取り立ててああしろこうしろって全然指図しないの。万事あなたの好きなようにいいのって調子で、家事手伝いもまったく拍子抜けするぐらいに楽チン！掃除はちょっちょつと埃を払う程度で、それに食事の後片付けも夫人と一緒にパツパツと片付けただけ。お2人はご商売してらっしゃって、絨毯やカーテンを売る店とか。店舗を2軒所有してらして、それぞれ各店に出勤なさるので、日中は家に私一人、犬たちと一緒にだけど。。

そして、語学学校は公立と私立のが2つ近くにあつて、私の希望通りに通えますから、これで勉強できるって、もう小躍りしてるのです。

ホストファミリーを紹介しますと、奥さんの Mrs.F.夫人は、小柄で眼が大きくって朗らかで、話の最後にホッホッホッと笑う人なのです。旦那の Mr.F はでっぷりとした貫禄のある、結構なお歳の人で、何とも云いようのない、実にけつたいな面白い人なのです。ユーモアがあるって云えばいいのか、一緒にお喋りしていると笑えてきてならないのです。それで、私はハッピー・ガールだねって、彼言うの。そしてくいつ迄もハッピーで笑っていて欲しい>って、裏庭の青い林檎の木から1個もぎ取ってプレゼントしてくれたり、ついでにそこらに落ちていた葉っぱをもくれるやうで、彼なりに私を気遣ってくださってる。実に愉快な人です。居間に凄く豪華なステレオセットがあるの。いわゆる音響マニアのようなのですが。Mrs.F.夫人が最初面接しに訪れた際私に、主人はクラシック音楽ファンだとおっしゃって、だから私すごく喜んだのです。ところが旦那を見ると、どうもそんな雰囲気でもタイプでもない、違うなと思ってたら案の定、彼の LP レコードのコレクションはクラシックのはほんの僅かで、あとはハワイアンとかギター音楽とか踊りだすようなのばかりなのです。ガッカリだけど、まあいいわよね。英国の階級社会ではミドルワーキングクラスかも知れない。つまり労働者階級でも一応裕福と云っていいわけ。モーターボートを所有してらっしゃるんですって。いずれ、テムズ河をボートで突っ走るなんてことになるのかしらとちょっと期待しているところ。。

いろいろとご心配をお掛けしましたが、こうしてひとまず居場所が確保されたことを喜んでます。毎日笑ってますので、どうぞご安心ください。ではバイバイ！ 千鶴子より

(新住所: ※※Great North Way,
Hendon, London NW4, England)

.....



1972年8月31日

お父さま&お母さまへ

ここでの生活も3日目を迎えています。まるで初めて英国を訪れたみたいに見聞きする全てが物珍しいです。元ホストファミリーの住まいのミドルセックスはロンドンの南の外れでしたが、今度ここヘンドン北の外れですので、どうも話し方が違うように思うのです。耳がまだ慣れません。それになんと云ってもここは庶民的な町なのです。買い物に出掛けるとあっちゃこっちゃで人々がペチャペチャかなり声高に賑やかにしゃべっていて面白いです。あまり上品で静かな町とは云えませんが、語学学校もあり、区立図書館もあり、そこそこ人の暮らしは充実しているように窺われます。

今日初めて語学学校を訪れ、最初のレッスンを受講しました。これ迄の学校は規模がかなり大きくて生徒数も結構多かったのですが、こちらのはこじんまりとしていた5人だけのクラスなの。それに私ぐらいの年齢の若い男性が先生です。初めちょっとあれって感じでしたが、わかりましたけれど、やはり先生だけあって、そりゃ綺麗な英語をしゃべるし、もの静かな雰囲気の人で、結構ハンサムでいい印象なの。やっぱり英国人の良さってのはこんなのかと感心させられる人なのです。もしかしたら悪くないかも知れません。ですから、がっかりせずに張り切って通学することにしました。たぶん週3回か2回になると思います。私立だからか、受講料の高いのには戸惑いぎみで、ちょっとショックでした。いずれ近々別の公立の語学学校が開校しますから、そちらをも検討してみます。暇な時間には図書館で本読みをするのもいいし、精一杯に勉強に打ち込めそうです。これ迄はまるっきり‘家事下働きのお手伝いさん’みたいな気分で萎れてい

たけど、今じゃれっきとした‘語学留学生’の気分なの。別に自分が偉くなったわけじゃないけど、この境遇の変化は大きいわけで、まるで夢みたいな気持ちです。

今、私の膝の上に犬が1匹ちょこんと座ってます。テレビを観ているとき、Mr.&Mrs.F. 夫妻の膝の上に座り込んで私のところにはなかなかやって来ないので、引っ張り込むのに一苦労でしたが、どうにかノーチというのがなついてくれたもんで私もホッとしています。犬に愛想するのも変だけど、一応家族してるわけだから犬たちもお馴染みになろうと思うの。私は犬が好きで好きでたまらないといった犬好きではないのですけれどもね。ちょっと日中私一人のときも5匹がドタバタと足元にまつわったり、ソファの上で一斉に雁首揃えて並んでいるのを眺めるだけでも思わず可笑しくて噴き出してしまう。

それから、旦那のMrs.F.さんがしょっちゅう何やかんやと私をからかっては笑わせたり怒らせたりするもので退屈しません。とにかくにもこのくだけた家族的雰囲気の中に溶け込もうとして努力しているところです。夕餉の支度はすべて奥さんがしてくれますがそこそこご馳走なの。量が多いのです。太らないようにとこの頃減量をちょっと考え始めました。

家の玄関前がGreat North Wayという道幅の大きな高速道路で、しょっちゅう大型トラックが行き交っています。家の後ろは家庭菜園があってMr.F.が野菜を作ったりしてますし。そこからの視界はずっと開けており、とにかく平坦でだっ広いのです。こちら近辺一帯は戦前から軍の飛行場があったとかで、その跡地なわけです。なだらかな広々とした丘陵地にゴルフ場やらスポーツグラウンドがあちこちに点在してます。文化的施設やら観光名所ではロンドン中央に

負けるけど、健康志向な庶民の暮らしにはとてもいいみたい。散歩道(public footpath)もあちこち整備されているとか、そのうち私もこちらの英国流の本格的なウォーキングを愉しめそうです。

Mrs.F.さんが、私が今書いてる手紙にちょっと一筆添え書きをしたいって。。

(略)

(彼の英文の手紙を日本語に翻訳しますと、「初めまして、ご挨拶申し上げます。愛らしいお嬢さんのチズゴが私どもの家に暮らしております。彼女がここでとても幸せでいてくれることを私どもは希望しております。ではご免ください。ご機嫌よう。J.F.より 」となります。いい方よね。。)

奥さんの Mrs.F.夫人もすごい早口でよくいろいろとしゃべってくれます。特に犬のことになると、どうやらブリーダー(犬の飼育家)らしいのですが、俄然熱が入り、猛烈な勢いでしゃべります。犬の品評会のことやらその楽屋裏話やら。まったく面白いです。私は格別犬に興味があるわけでもないけれども、Mrs.F.夫人のお喋りに耳が慣れてきて少しでも聞き上手になれたらいいなと思ってるのです。いずれ又。さようなら

千鶴子より



1972年9月1日

お父さま&お母さまへ

ここへ移って来て5日目を迎えています。これ迄はテスト期間というか、お互いに様子見てことなのでしたが一応6ヶ月間この家庭に滞在するという約束を昨日 Mrs.F.夫人としました。話を伺うと、紹介斡旋してくれたエージェンシーに払うお金が契約期間によって違うんですって。経費は大体日本円で8千円程度とか。オペア

という制度は、語学研修という名目で主に欧州大陸から若い女性たちを労働力として誘致し、オペア滞在ビザやらの優遇もあって、此の国の国家的政策の一つでもあるのですが、一方でその斡旋仲介を商売にして儲かっている人々もあるわけです。世の中さまざまです。日本人って謙遜で謙譲だから、すぐにお世話になっているとか、お世話してあげてるとか言うけど、はっきりとしたギブアンドテイクなのですから、当然こちらにもあちらを選ぶ権利があるのです。いちいちナイーブではいられないなって、喰うか喰われるかのどっちかって怖さも解かりかけてきたところ。。

元居た J.家で一緒に留守居役してもらってたアイリンという女性から、なんと私に今日手紙が届いて、全然あとは心配しないでいいから新しい家庭で幸せになってくれて言葉をわざわざ伝えてくださったの。あまりにも寛容で優しいので涙が出ました。彼女に迷惑を掛けてしまったとやら申し訳なかったとやらいろいろと気が咎めていたもので尚更に嬉しかったのです。もはや関係はできないわけだけど、彼女はいつまでも懐かしく覚えていたい人です。マーガレットにしてもそうだけど。まだ不慣れな異国暮らしでとても心もとない時期に J.家でたまたま遭遇した彼女ら生粋のイギリスの若い女性たちって、たとえ行きずりだとしても、本当に忘れ難いです。とても配慮が行き届いており、その気遣いの優しいこと。おそらく航空会社に勤務しているせいもあってでしょうけれど。。もしかしてこれ迄も J.家でいろんな国籍のオペアの女の子たちの出入りがあって、私みたいにハッピーじゃないからって J.家を去ってゆく女の子らを彼女たちは結構見慣れているのかもしれないけれども。。

それで今日私から Mrs.J.夫人宛に手紙出したの。詳しく私の方の事情を説明して、

彼女にさよならを言いました。まるで不義理をしたみたいな負い目は厭だし。レベッカに会えないのは淋しいとやら、J.家でいろいろと体験できて有り難かったとやら一応謝意を述べておきました。私も英国流の堂々とした自己主張のできる人間になれたみたいです。これで後はすっきり何もかも忘れて、一途に勉強に専念できそうです。

さて、今日は学校の授業が無い日なので、近くの区立図書館へ出掛けました。F.家の玄関前の高速道路を越えて、真っ直ぐ南へ向かってゆくとすぐの処にあるのです。その途中は広々とした丘がくねくねと続いていて、ずうっと遠くにレンガ色の屋根が整然と並ぶ住宅地が遙か彼方まで続きます。緑の中に点在する家々は、本当に美しいです。ポオーツとしながら暖かな陽射しの中を歩いていたら、突如として「ボク、そっちじゃないのよ！」「うん、解ってる・・・」なんて日本語の会話が聞こえたの。幻聴じゃないのよ！まだ頭の中は日本語が流れているので、まるで日本に居るみたいな気で無感動に聞き流してただけど、あれっ！ここは英国なんだよなって一瞬意識を取り直してふと可笑しくなりました。どうやらここヘンドン附近には相当数の日本人家族が住んでいるようなのです。やはり日本語の響きが懐かしかったです。

ところで、図書館内をぶらぶら歩き回って、あれやこれや気の赴くまま書棚から本を手にとって眺めていたら、まるつきりいっぱしの留学生気分になって猛烈に幸せなものでした。活字に飢えていたのかも知れない。それに今や自分があるべき居場所にどうにか落ち着いているといった手応えが無性に嬉しかったのです。そうなんと俄然自分は留学生なんだからと調子づいてもっとイギリス社会について知りたい、馴染んでもゆき

たいと意欲が湧いてもきたの。それで、この地域で催される‘市民講座’やら、語学学校とかコンサートクラブなどのご案内のあれやこれや、カウンターに並べてあった、ありったけのパンフレットを貰ってきたわけ。貰っていいですかと訊くと、誰でも係りの人はニコッと笑って親切に<どうぞ！>って言ってくれます。こんな風に誰もが等しくチャンスを与えてもらえるってのが此の国の賞賛すべき特質らしいの。此の国に‘make the best of it 主義’っていうのがあるらしいんだけど、翻訳すると、「それがなんであれ、万事チャンスと思って最大限に生かせ！」ということ。それって、確かに私にも当て嵌まるわよね。「子どもの本のコーナー」では児童図書を3冊読みました。子どもの親やら係りの人たちの会話もごく自然に耳に聴こえてきます。とってもいい勉強になるのです。

誰にももう煩わされずに、気持ちよく暮らしています。5匹の犬も私の周りでバタバタとじゃれあってます。いつも笑いが絶えません。それじゃ又。さよなら 千鶴子より

.....



1972年9月5日

お父さま&お母さまへ

もうここへ来てから、1週間が経ちました。やはり歳月は無駄じゃないもので、グングン英国の生活に慣れてきています。ところで、ここF.家の食事は量が多いので、私は消化するのにしんどくてたまらないのです。それが奥さんは小柄で痩せている人なのです。私はどうも太る体質(たち)なのじゃないかと思うので、何とか食べるのを少なめにしようとするのですが、ご主人が<食べなさい、食べなさい・・・>って押し付けるのです。そのうち胃袋が大きくなるんじゃないかと心配なのです。それでちょっと腹ごなしに食後に

は必ず裏庭でボール・エクササイズを心掛けています。ボールを空を目掛けて放り投げては受け止める、その繰り返しですが、これが結構疲れるの。いい運動にはなってるようです。

ところで奥さんの Mrs.F.夫人はいろいろな料理のレパートリーが実に豊富で面白いのです。英国料理は勿論、とにかくヨーロッパ中の…。明日は南アフリカの料理とかなんですって。まあいずれにしても肉とか卵とか、使う材料そのものには大差ないのですが…。彼女の料理の腕前を台所で横合いから眺めると目をパチクリしちゃうことがあるの。米の炊き方が極めて妙なのです。シャカシャカと水で米をゆすいで鍋に入れたのをしばらくバアーツと大きなガスの火で炊いて、しばらくするとそれに熱湯をたくさん加えて煮て、それを掻き混ぜ、あとで笹(ざる)に移して、ザブザブと水で洗うのです。ですから日本みたいにお米が粒々にふっくらと炊き上がるという具合には勿論なりません。見た目も違えば舌触りも違うわけ。お米って感じがしません。日本の炊飯器って、こちらには無いみたい。残念！一番思いがけなかったのは肉を洗うことです。大きな肉ならともかく、ミンチ肉を笹に入れて、ザブザブ洗うのです。そういえば、日本じゃ別に汚いなんて思わずに肉類を煮たり焼いたりして食べてたけど。でも正直なところ、ミンチ肉を洗うのって面食らっちゃいました。それから、いろんな珍しい料理法を教えてもらったけど、お父さまやお母さまが喜びそうなものって殆ど無いの。大抵が肉料理ばかりだから。ですから、いつか将来英国に来てもらうにしても、何か食べるもので喜んでもらえないのじゃちょっと困るなって思いました。

或る日本商社のロンドン駐在員の奥さまから伺ったのだけど、ご主人が日本料理しか食べないのですって。毎日の食事の献立づくり

がもう大変。それで、モヤシを自家栽培しているって！そのモヤシだけど、この前、缶詰のモヤシを食べました。やはり味が妙な具合で馴染めせんし。それにマヨネーズが食べたいなとふと思ったのです。そういうものがこちらにもあるんだけど、やっぱり味が違うのです。こちらの食に徐々に慣れてはゆくでしょうけど。野菜でも、まあ花でもそうだけど、同じようでやっぱりどことなく違うのです。キュウリなんかも、太くて大きくなって瓜みたくて、味は日本のほうが断然いいのです。そんな一つひとつにいちいち神経を尖らせてしまうっていうか、日本と違う！って内心がっかりして、つい苛立ちちゃうわけなのです。‘日本恋し病’のまず第一が味覚なのかも知れない…。

この頃ではこの暮らしにも慣れ、留学生並みに語学の勉強に励んでいます。日中、自宅に一人ですので、気楽にお掃除したり、勉強したり、好きなように時間を過ごしています。時折犬どものお相手して遊んであげたり、退屈することがありません。

この奥さんの Mrs.F.夫人は、2人の子どもは結婚したことだし、何ごともまあ気取らずに堅苦しくなく、ごく気楽に暮らそうって人なもので、私などはオペアの家事手伝いなど申し訳ないほど手抜きに思えるし、一見雑っぽい暮らしぶりかなって印象がなくもないけど。そりゃあ感心するほど犬にはまめまめしく世話するの。犬の散歩は勿論だけど、彼らの餌だって、ドッグフードじゃなくて、彼女のお手製でとても栄養満点のご馳走食べさせてるのですから。やはり主婦としての堅実さというのは日本とも違うにしても違わない面もあり、Mrs.F.夫人から学ぶことは多いのです。そんな家庭の状況だから私も犬の一人(!)ぐらいに思って我がままに居させてもらうことにしました。

この前の日曜日、オペア仲間の友だちのクミコさんが訪ねてくれたの。午後からずうと私の部屋で2人でお喋りに夢中で、ついっかり夕食時になっちゃって、でもちゃんと彼女にもどろどろって夕食をご馳走して下さったし、ケチじゃないのが本当にいいです。ご主人の Mr.F.がおっかしな人だからなのか、子どもたちも愉快的な人たちです。ちよくちよく親たちに顔を見せに訪ねて来ます。上の息子が25歳で下の娘が21歳なのですが、冗談ばかり言って、おっかしい人たちなのです。そんなところで機嫌よく愉しくやっていますので、どうぞ安心してください。

ではバイバイ！ 千鶴子より



.....
1972年9月12日

お父さま&お母さまへ

この家庭での生活も2週間を過ぎて、私もようやく落ち着いています。日中誰もいないので、まったく気が楽なのです。家事の手伝いも大したことないし、語学学校には週2回行って、あとは図書館とか、買い物とか、気分に自由に時間を過ごせるわけです。今日この頃、急激に肌寒くなって冬物・セーターなどが必要になって、この前買い求めました。靴は日本で買ったものがかかなり古びてきたので、買い替えたいのですが、21.5センチのSサイズの靴などこちら辺りの靴屋ではまるで見当たらないもので困ります。

さて、来週からは週5回公立の語学学校へ通うことになりました。結構忙しくなるでしょう。12月に資格試験があるとやら。ケンブリッジ英語検定試験っていうの。私には意味があまり無いと思ったけど、授業は一応それに沿って進んでゆーらしいの。語学習得の一つの目標になるし、一度獲得すれば世界に通用する英語資

格なんだとか。それも悪くないので一応今のところは受験する心づもりでいます。公立は授業料が安いので助かります。いい先生に出会えたらいいなと、そればかり思っています。まあ、語学の勉強は時間が掛かるとは思わなくてはなりません。でもいつか私もそのうちネイティブ並みに素晴らしくしゃべれたり書けたり出来るんじゃないかって思うと、やっぱり正直それは憧れであり嬉しいことなのですから頑張ります。考えてみると、専門家としてのトレーニングを受けるために1年以上も前に英国に来たことは、初めは長いと思ったけど、やっぱり決して長くも無駄でもないようです。

この家の前は高速道路で、トラックが気狂いみたいにひっきりなしに往来していますが、周辺は見渡す限り広々とした平地で、緑がそりゃ美しいのです。夜になると、丘の向こうの町の灯りが見えて、そりゃ綺麗です。その町の公立の語学学校にバスで通うの。どうやらその町の向こうにも、さらに丘が遠く遥々と続いているようなのです。バス停から降りてちょっと歩くんだけど、学校の周辺には、いわゆる整備された公園じゃありませんが、日本によくあるような藪とか広っぱがあり、日本と同じような雑草が茂ってたり、野の花も咲いているので、学校の行き帰りの道すがら頻りに日本のことを懐かしんでいます。

この F.家の子どもたちは親孝行なのか、いわゆる家族の団結が強いのか、よく親を訪ねてきます。この前などは息子さんの方の奥さんが見えて、彼女に日本語を幾つか教えてあげたの。私はこの頃、日曜日は大概家に居ます。居間でテレビを観たり、ホストファミリーと団欒したりでくつろいでます。寒くなってきたし外出するのも億劫だし、皆と一緒にごろごろしてるのもいいもんです。私ももう子どもじゃないのですし、

よその家庭にそんなにベッタリ依存する必要もないわけで・・。ただの仮住まいですけどね。家事手伝いのやることはキチンとやっていますし。犬どもとも仲良くなって、まるで平穩で、随分とお気楽そうに聞こえるでしょ！夜などテレビを観てる時、彼らはごろごろと私の膝の上に乗ってくるのよ。それがちょうど大きめのカーデガンを最近買ったばかりなのだけど、あったかいのか、その下に潜り込むわけなのです。犬って、なかなか厄介なものですけど、私にしても気分転換に結構になるし、お蔭でやはり家中いつも笑いが絶えません。

ここの旦那の Mr.F.は駄洒落の好きな愉快な人だけど、奥さんの Mrs.F.夫人はそんな彼を決して軽んじたり侮ったりなぞしないのよ。ずうっとご夫婦一緒にご商売に励んできたからかパートナーの感覚がおりなのでしょうけどね。日本風のご主人に仕えるっていうのもちょっと違うけど、でもやはり万事しっかりと気遣って夫を立てているって印象がある。やはり彼女の才覚で F.家の暮らしがどうにか帳尻合ってるんだなって思うの。万事手堅いの。旦那のご機嫌を損ねないように殊更気遣ってるという風でもないんだけど。確かに犬たちもだけど、オペアの女の子ですらも、結構そんな彼ら夫婦の勘定に入っていて、当然一役担ってるんだなって気付かされる。イギリスであれ日本であれ、やはり所帯を持てば辛抱って女性の値打ちなんだなってふと教えられた気がしたの。

やはり主婦として肝心なのは料理を手抜きしないってことかな。よくでっかい七面鳥の丸焼きを食べさせられるんだけど。ロースターキーといって、お腹の中に香り付けの野菜やらの詰め物をしてオープンでこんがり焼くの。結構お値段の張るものだし、焼きあがった七面鳥

にはびっくり！私なんか凄いご馳走！って感激しちゃうけど。食卓の真ん中にその丸焼きをでんと置いて、Mr.F.が大きなナイフとフォークを手にしながら、切り取った肉片を居並ぶ家族一人ひとりのお皿に盛り付けて下さるの。いづこもこうしたおもてなしは一家のあるじの役目なんだけど、ちょっとばかり儀式っぽくて、Mr.F は得意満面よ！なかなかいい食卓の光景です。でも正直いって七面鳥は淡白な味なの。チキン(鶏)の方が断然柔らかく甘いのです。でもでも、なんと云ってもあっさりした日本の食事が恋しいです。

じゃあ又。さよなら 千鶴子より

.....



1972年9月13日

お父さま&お母さまへ

今日で英国での生活も4ヶ月目を迎えます。これ迄はスッタモンダでなにかと落ち着かず、一時はとんでもない迷路に陥ったような心境でしたが。今でもまだ先の見通しは今ひとつはっきりしないにしても、それでも随分と今自分が居る場所で精一杯やれることはやってるという手応えありですから、ここの暮らしもかなり順調に慣れてきたと云えましょう。日本に居ても3ヶ月なんてあっという間に経ってしまうわよね。でも実際のところ私は本業を怠ってるというか、サイコセラピーから敢えて遠ざかっていることで幾らか後ろめたい気分もあり、このままこんなところできつ迄ものんびりもしてられないとの焦りを時には思わなくもありません。だから断然お気楽とも違うけれど、まあ此の国の人々やら生活に馴れ親しめる感覚をまずは掴むことが先決ですから、しっかりと時を稼いでゆくことだと思っています。

今、家の裏の芝生を歩いてきて樹の下に座って便りを書いています。こら辺一帯、

かつてだっ広い飛行場だったとかの跡地で、遥かに続く芝生の地のあちこちに野球場(グラウンドやスタジアム)とかゴルフ場やら、他にもいろんな運動施設の建物があります。遥か遠くから競技に熱中する子どもたちの喚声が時折は風に乗って運ばれてきますが、見渡す限り人の気配もなく、空がどこまでも高く悠々としています。太陽はひどく気儘で、陽射しがカッカッと照ったり、姿を雲間にひそっと隠れたりしています。

来週から語学学校での授業が始まります。月曜～金曜の朝の3時間ほど授業を受けることになりました。それも、この前ケンブリッジ英検受験のための「査定テスト」を受けたのだけど、成績が良かったらしく、トップクラスに入っているの。私ぐらいだと、まずロワー・ケンブリッジの試験を受けるんだけど。そのクラスは、もう一つ上の資格試験を目指すコースなのです。ケンブリッジ英検のプロフィシエンシーっていうのだけど。これに合格すれば英語力はネイティブにかなり近いとの判定になるらしい。ともかくあまりに付いてゆけないようだったらクラスを替われるし、まあ頑張ってみようと思ってます。

以前のように、一日も早くまともな職を持ちたいなんて全然考えなくなりました。というのは、就職するのが問題なのではなくて、来年の秋からのトレーニングを受けるために相応の語学力を付けることこそが取り敢えず肝心なのですから。就職して独りでアパート暮らしをしても全然お金が貯まるはずもないと思うし、今のうちに気楽にホームステイしている状況で、此の地でいろんな無駄な事柄をあれこれ見聞きする余裕が与えられているってのが結構貴重なのです。日本に居たとき、オペア語学留学っていうのを知って良かったなと思います。やっぱり私は慎重に計画して実行してやれるタイプの人間なのだと、自信を持ちました。

ところで、肝心なトレーニング・スクールの件だけど。候補は2つあり、いろいろと比較検討した結果、どうやら日本に居たときに内心狙ってた処じゃない処へ行きそうです。まったく実際に見てみないと解んないものです。まだ登録の時期じゃないのですが、そちらの【タビストック・クリニック】の先生の方へ連絡はしてありますし、今後慎重に対処してゆかねばと思ってます。

さて、私の寝室が高速道路沿いに面しているため夜間でもトラックの行き交う騒音が甚だしく、よく眠れないため、Mrs.F.夫人に相談して、裏庭に面した、かつて息子さんの寝室だった部屋に移ったのです。倉庫代わりに不要な物をごっそり押し込んだままにしてあったもので綺麗に片付けるのが一苦勞でした。奥さんがいろいろと尽力くださって、小柄なわりに力持ちで驚いたのですが、お蔭でどうにかやっと女の子らしい部屋になりました。子どもたちが結婚して去った後、彼らの個室をほったらかしにしてあったようで、これを機会に綺麗にするつもりらしいです。今週の末には壁のペンキ塗り変えて、床の絨毯も変えてくださるってことになりました。

新しい寝室は朝の目覚めに裏庭から注がれる朝の光がほんとうに美しくって、眺めも、夜なんて窓越しに遥か遠くに点々と灯りが見えたり、見渡す限り緑のなだらかな丘が広がっていて嬉しいです。ちょっとぶらぶら散策に出てみると、空気が澄んでいて実に気持ちが良いです。

それから、この前ヘンドンの繁華街でヒョイと思いがけず私のサイズの靴が買えたの。それが赤でとても安く買えたのです。これでほっとしました。全然不自由してませんので、ご安心ください。ただ太らないように気をつけています。

バイ！ 千鶴子より

.....



1972年9月23日

お父さま&お母さまへ

日本は美しい秋なのだろうと懐かしんでいます。こちらはおかしい気候で、季節を味わう情緒が全然ありません。雨が降って、まったくみじめになるような寒い日が続いたと思うと、テカテカと夏のような陽射しがまたやってきます。それが、朝起きると窓の外が霧なのです。一望に見渡せる緑の丘がボヤッと白い霧に包まれているのです。ここの人たちは「まったく、おそろしい天気だ・・」と嫌がりますが、私はめずらしいこともあって綺麗だと思います。それから、フワッと暖かな陽射しが差し始め、その日は一日いいお天気になるので、霧の朝も悪くありません。そして、学校へ出掛けます。バスに乗って、丘の向こうの町へ行き、バス停で降りて、道路を横に逸れると野原があって、その向こうに小さな公園があるのです。芝生にとこところ樹木があるだけのあっさりしたいい公園です。時々でっかくて、真つ当な犬だけど、ちょっとグロテスクな顔をしたのが朝の挨拶に来ます。それと別れて、学校へ向かいます。時々リスがチョロチョロ姿を現し、あっちこっち忙(せわ)しく食べ物をあさっています。テレビの映像でぐらいしかりスって見るのがなかったけど、実際はすごく可愛いです。尻尾が大きくてフサフサしているのです。やっぱり怖がり近寄っては来ません。学校の行き帰りに野原を通ると、そうしたぐ何でもない風景が日本と全然違わないので、日本に居るような錯覚を起こします。

学校の授業は3時間だけど、途中休憩を挟みます。コーヒープレイクといって、ちょっと息抜きでコーヒーやらビスケット類をいただくの。生徒はそれぞれ国籍の違うのがごちゃごちゃ居ます。6クラスぐらいあって、1クラスが20人程度。休憩時間には皆誰しもがドオーツと休憩室に集

るわけだから、外国人の溜まり場みたい！物凄い光景です。あちこち母国語で声高にしゃべっているの、その喧騒たるや凄まじい！週5日間ですが、2人の男の先生が交代で教えてくれます。トップクラスですのでやはり易しくはありません。年輩者も結構居て、此の地の滞在が長くてすっかり根付いていると云った感じの人が大半です。各自お国訛りは抜けないにしてもペラペラと英語を喋るわけ。堂々として悪びれず臆せず！むしろそんなことが勉強になります。語学は要するに心臓が物を言う。臆病で引っ込み思案じゃダメで、女も度胸ってわけ！日本人は私の外に2人居ます。1人はオペアで、もう1人は海外駐在員の奥さんです。授業内容は付いてゆけるのですが、ちょっと背伸びの感があります。それで頑張らなきゃ緊張するので毎日クタクタです。3ヶ月の期間ですので、退屈しないで一生懸命やれるのは良いことだと思ってます。

そちら、S子の方も順調の様子ですし安心ですね。私も勉強に集中できる日々で、一応満足しています。でも留学というのは、想像してた以上に何かとしんどいものだというのが率直な感想です。ではさよなら 千鶴子より
.....



1972年9月28日

お父さま&お母さまへ

日本も秋を迎えたようですね。台風が頻繁にあるらしいとか。こちらはとても気持ちの良い、夏の初めのようなお天気です。お母さまが京都からの帰途、台風のため列車が立ち往生し、一晩車内で過ごした話を伺いましたが、とんだ災難でしたね。腰を痛めなかったか心配です。なかなか危機感もありましたようで、それから客席にお茶も振舞われたんだとか、気分を和ませるものもあって、結構面白かったのかな？

昨日の日曜、朝から裏のグランドが何やら騒がしいと思ってたら、奥さんが犬たちを散歩に連れて行って戻ってきたところで、私に、グランドで警察犬の品評会が催されているから一緒に行こうと誘ってくださり、大急ぎ犬たちは家に置いて Mrs.F.夫人と2人で出掛けました。

まあ、驚いた！スタジアムが何千人という人でびっしり埋まっていた！この肌寒いぐらいの野外でベンチに腰掛けて、次々に警察犬が課題をやるのをじっと眺めていて、うまくやれたら拍手してやるの。犬たちを競わせながらも、日頃の訓練の成果を一般に見てもらおうという趣旨だから、誰しもが協賛を惜しまないといった大真面目な感じで単なる娯楽でもなさそう。さすが犬好きの国民だけあると呆れるやら感心するやら。障害物を飛び越えるのやら、‘泥棒’を追いかけるのやら、いろいろと課題があって、見物人を喜ばす趣向をもあれこれ凝らしてあって、傍らでは音楽隊も演奏してたりして大いに場内を盛り上げてた。結構愉快なものでした。でもまあ、すごい犬好きだよ、英国の人って。ちょっと呆れたよ！

じゃあ又。バイ！ 千鶴子より



1972年10月4日

お父さま&お母さまへ

ずうっと前に Mr.F.さんに頼まれていて忘れていたんだけど。キャノンの電子計算機が欲しいんですって。小さくて簡単な+・-・×・÷のんですって。それで、カタログを送ってもらえないかって。それでいいのがあったら、送ってもらいたいって思ってるって。それで代金は私の懐に入るとのことになっているのですが。人の話に依ると、航空便だと一週間も掛からないんですって。船便だと2、3ヶ月のようだし、郵送料も彼が当然出すでしょうし。ともかくもカタログを送ってくださいますか？

普通の封筒に入るようにして、一枚でいいです。片手に持てる小さいサイズの電卓で結構なので。よろしく願います。

それから、いつぞやお父さまからクリスマスに私宛に届けていただく荷物のことで問い合わせがありました。秋田の「姫毬(まり)」がいいわね。あれって以前 J.家に日本からのお土産として差し上げたのでしたけど、とても喜ばれたの。あまり高価なものではないわりには、すごく見栄えがするとかこちらではとても珍しがられるの。お土産ものとしてはあの程度でいいと思います。F.家で日本のお箸を見たいって一度話題になったことがあったのですが、簡単なのを3、4膳も貰おうかなって思います。どうかしら？

この前、Mrs.F.夫人の誕生日だったのです。ご主人から子どもたちから、それぞれお祝いのカードが贈られ、それらをずらっと居間に並べて飾るのです。それから、花が盆栽風に豪華に盛り付けられた花籠、そしてバラの花束(ご主人から)が贈られて、なかなか愛情表現というものはいいものですね。ご主人なんてカードに「愛する妻へ」とかいろいろ言葉を列ねて、その末尾に××××ってあるの。それはキスのマークなのです。可笑しいでしょ！？私は、奥さんにハンドバックに入る小さな鏡(日本製)をあげたの。彼女、喜んで私のほっぺたにキスしました。なかなかいいものです、キスっていうのも。ご主人も欲しがって、<明日は私の誕生日だけど、何かくれるのか>と見え透いた嘘を言うので可笑しかったです。彼流のジョークだけど。この家に来たとき私は彼らに土産物を用意してなくて何もあげませんでした。こちらでは日本と違ってお互いにそう無闇に物をプレゼントなどしないものなの。でもちゃんとした特別な日、誕生日とかクリスマスとかは、家族同士こちらの人々も貰ったり

あげたり喜び合います。カードを添えてるのがいい習慣よね。物だけじゃなくて言葉があるってことが・・・。

.....こちらでは徐々に日本製の電化製品が注目されつつあるのですね。電卓はともかく、私もテープレコーダーがあれば随分と重宝だと思うのですが。普通日本で1万円レベルのものがこちらでは3万円ぐらいするので(ソニーなんかだと)、贅沢かなと思ってまだ買い求めるには至ってません。じゃあ又。 千鶴子より



1972年10月6日

お父さま&お母さまへ

日本の切手届きました。すごく立派で綺麗で感激しました。懐かしくってもう涙が出そうでした。寝室のペンキ塗りに来ているおじさんに見せました。ついでに私がホームシックなのと打ち明けたら、彼が言うのよ！<どうしてだ？私など18のときに、メソポタミアの砂漠に航空兵として4年間働いていた。その間ハッピーで、全然ホームシックなんぞには掛からなかった。変わった経験をするということは素晴らしいことだ。お姉さんたちはあなたの幸せを羨ましがっているのじゃないか。遠く離れてみれば、両親の愛を新たに強く感じられる。当たり前前に思っていたことが新鮮に思える。それはいいことだ。此の地で、いろんな経験をして、ハッピーであることが出来るだろうとか、実にいろんなこと慰められちゃいました。小柄なシワシワした顔のおじさんだけど、いいこと言うじゃない！労働者階級でも無知蒙昧じゃない、骨太だ！で、私もあまり日本ばかり懐かしんでいないで、そろそろ此の地にしっかりと根ざしてゆかねばと反省させられたところ・・・。

ところで、どうも人のしゃべっていることが解らないと思ったら、道理で書き言葉はともか

く、話し言葉なんて、まるっきりこれ迄習ったこともない、これでも英語かと思うような、いわゆるスラング(俗語、方言みたいなもの)がドッサリなの。それでそれに気が付いて、会話を主にしたテキストブックを図書館で見つけて、それから「スラング辞典」なんてものも・・・。やっとこれで何とか勉強もまともにやれると安心した次第です。言葉って改めて大変なんだなあって思ったの。語学学校は結構楽しくやっています。私たちのクラスは、資格試験(プロフィシエンシー)ってのを狙っているのだけど。それは18歳の子が大學へ入るときに課されるのと同じレベルなんですって。18といえば、小説でもなんでも、ペラペラ読めるでしょ。ある子はもう創作なんかするでしょうし。18なんてバカにするけど、すごい能力なのよね。12月の試験には絶対合格しないと思うけど、来年の6月のには受かるかも・・・。まあ、ものは試しだから、挑戦してみます。

さて、Mr.&Mrs.F.さんご夫妻は昨日結婚式に招かれてお出掛けなのでしたが。まあ、びっくりした！いつも面倒なことは止めましようって、バサバサってどうでもいいようにやっているけど、いざというときはものすごい紳士・淑女に変身するの。ご主人は黒い背広に蝶ネクタイ。奥さんは紫の床に届くような、ビラビラしたフリルのいっぱい付いた豪華なドレスに、なにかミンクかなんかの毛皮の肩掛けを手にして、西洋式のドレス・アップってこんなのかって目を瞠ったわけ。いつもは質素で、お金持ちって暮らしでもないのに、凄い！ってびっくりしたの。そうならば日本人は絶対着物で対抗すべきだと思いました。あんなふうにはどうしたってなれないなって思ったわけ。でも着物で正装すれば、私たちはすご～くなれるものね。日本から届いた切手を眺めながらいろいろと考えました。 さよなら 千鶴子より

.....



1972年10月10日 =速達=

お父さま&お母さまへ

取り急ぎおたよりをします。せっかく落ち着いて勉強に専念していると安堵してくださってたでしょうから、さぞかし驚かれると思われそうですが、またまたホストファミリーを変わることにしました。遥か遠いロンドンのことだから、こちらの事情のあれやこれや詳しくは省きますけれど…。なんだかんだとご心労をお掛けしてご免なさい。

実は、昨晚決心したほやほやなところなのです。まだこれからどうなるものやら、次の落ち着き先も決まってないものですから。でもとにかくオペアの求人はいわんさかあるのですから全然心配しないでよろしいのです。取り敢えずしばらくそちらからのたよりは控えていただくようにということだけでもお伝えしたいと思ったものですから…。今朝、早速この奥さんの Mrs.F.夫人も次のオペアの女の子をエージェンシー(斡旋所)に申し込みましたみただし、万事うまく行くと思います。

まあね、話せばいろいろあるけど。ここロンドン北西部のヘンドンという地域に住めたことでいろんな経験もしたし、彼ら Mr.&Mrs.F.夫妻と彼らの犬どもは良かったけど。正直なところ、もうちょっとゆとりのある小綺麗な生活がしたくなかったというわけなの。暮らしの中に美しいものがないってことは私ダメなの。眼を愉ませてくれる何かがないと私って無性に飢餓状態になるみたい。眼の前に出されたものは一応いただくのが礼儀ならば喜んでいただくけど。でも本音を言えば、まずいものってどうしても気持ち欲しがらないの。それなものだから、まずいなら食べない方がましってことになるわけで。本当は飢えているのに…。こここの安穩な暮らしに何が欠けてるのかってこと

は、彼らの咎でもなんでもないわけで…。彼らはユダヤ人でね。うん、ちょっと違和感を覚えたこともあったの。でも問題はそういうことじゃなくて…。敢えて無いものねだりでいうと、やはり‘静かになりたい・考える時間が欲しい’ということに尽きるみたい。やはり前のホストファミリーの J.家のときもそうだけど、彼らと一緒に‘家族ごっこ’だけに充足して日々を過ごすにはそもそも私の個人的事情からして無理があるといわざるを得ないの。

このヘンドンという地域の田舎っぽさやらホストファミリーのユダヤ出自のミドルワーキングという階層にはどうしても馴染めないものがある。それに、将来此の国で私が専門性を身に付けるにはもっと別の何か違う‘経験’が求められているように思えてならない。それはここに安住しては得られないことは確かだから。言うなれば、直感的にこのままここに居ては運が開けてゆかないという思いなの！ ちょっと説明が難しいんだけどね…。

ごく短い間だったけど、それなりにここで耳にしたもの眼にしたものは貴重ではあったわけです。例えばその一つ。先日お話した、ペンキ塗りのおじさんが驚くべき人なの。奥さんから話聴いて、彼がほんと稀有な人なんだなって痛く感激したり、そんなことも良かったけど…。こんな行きずりの人との出逢いでも忘れがたい記憶を残すということがあるのってすごく感慨深いです。

それから、先日のそちらからのたよりで、我が家の池の濾過装置を取り替えた話だけど。お陰で随分と水の流れる音が静かになったことを伺い、すごく嬉しいです。これで私も安心して日本へ帰れる。いずれ帰国した折にはのんびり我が家の錦鯉たちの顔を眺められるって心待ちにしています。近々に又。さよなら 千鶴子より

.....